

02

阿部公彦
Masahiko ABE

連詩が教えてくれるもの

セゾンと連詩

1998年の秋、セゾン文化財団の支援で日英詩人による連詩の会が開催された。参加したのは日本からは大岡信、川崎洋、佐々木幹郎、イギリスからはチャールズ・トムリンソンとジェイムズ・ラズダンという5人の詩人である。連詩は同人誌「権」の詩人たちによってかねてから行われていた試みで、同人だった谷川俊太郎、大岡信、茨木のリ子、川崎洋、吉野宏といった詩人たちがその後華々しく活躍したこともあり、世にも広く知られている。もちろん、多くの人は日本古来の連歌や連句のことも想起するだろう。

ただ、このときの催しは日本語という枠をこえ、通訳を介して異言語の詩人がともに連詩の制作に携わるというものだった。かねてから国際的な連詩を行っていた大岡を中心に、三島の旅館に泊まりこんで4日間缶詰になりひたすら詩の制作に励む。詩人たちにとっては精神的、肉体的になかなかハードな体験だったはずだ。とくに連詩初参加となったラズダンにとっては難しいこともあっただろう。しかし、途中、ハプニングなどあったとはいえ、制作は無事完了、飯田橋のブリティッシュ・カウンシルでは制作体験を振り返ったシンポジウムも開催され、作品も「現代詩手帖」に掲載された。ジャーニン・バイチマンとともにこの催しに翻訳・通訳係としてかかわった私にとっても、この会は非常に珍しい、貴重な体験となった。

このときの様子や「ハプニング」についてはすでに拙著『即興文学のつくり方』（松柏社 2004）で詳しく扱っているのでここではあまり深くは立ち入らない。ただ、イベント開催から15年以上が経過し、「連詩」というテーマについて想いが及ぶ機会もこれまで何度となくあったので、連詩的なものと知の関係について、少し原理的なことを考えてみたい。

みんなで書く小説

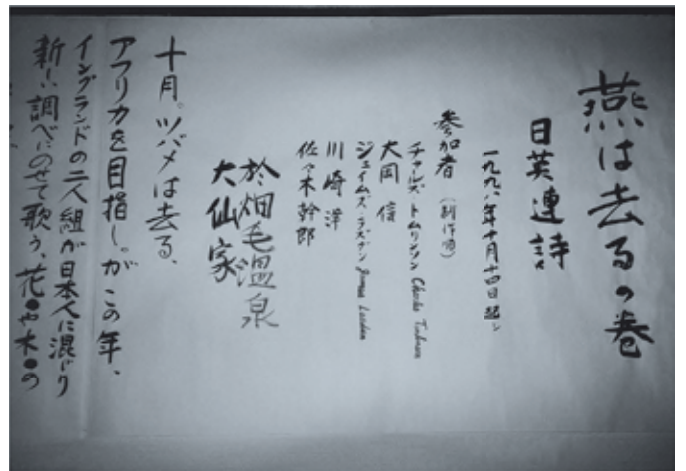
二つほど具体的な例をあげよう。

今年の10月、京都大学で開催された日本アメリカ文学会全国大会で、小説家の藤野可織が特別講演を行った。タイトルは「書くことを教えること」。藤野は自身がデビュー以前から「自分はきっと小説家になるだろう」と確信していたと述べつつも、創作の方法というものはそう簡単に教えられるものではないと話始めた。

藤野はもともと同志社大学の大学院で美学の研究をした経験を持つ。そのときに教わったもっとも大事なことが、日本語の文章をきっちり書くことだった。何しろ「自分はきっと小説家になるだろう」と確信していた人なので、先生の厳しい指導の前に、負けてなるものかという闘志をみなぎらせたという。



日英詩人による連詩制作の会場となった、静岡県伊豆畑毛温泉にある旅館「大仙家」での朝食。右側手前に着席しているのが筆者（1998年10月14日）



制作された連詩（1998年10月）

藤野は今や芥川賞作家。小中学生や高校生に小説を書くことについて教える機会もある。しかし、そんな中で藤野はおもしろい試みを始めた。参加者に共同で小説を書かせるのである。一人一文ずつ分担し、前の人の書いたものを受けて、ストーリーを展開させなければならない。つまり、他者のことばを発展させる形で自分のことばを繰り出すのである。しかもそうやって差し出したことばは、さらに他の人のことばによって新しい展開へと導かれる。

まさに連歌的、連詩的な発想である。こうした作業を通し、自分の中に異物を取りこむ訓練ができそうだ。そもそも小中学生に、大人っぽく洗練された華麗なことばの書き方など教えてもほとんど意味はない。レトリックを使いこなすのはいつでもできること。そもそも読解力が養われていなければ、つまり、ことばの装飾を自分で読み取り楽しむことができなければ、工夫を凝らしたことばを連ねようとしても空回りするだけだ。それよりもっと大事なことが、この段階ではある。

それは文章では、自分でも思ってもみなかったことができる、書けるということを知ることだ。文章を書いていると、自分の中の他者と出会うことができる。しかし、出会うためにはその準備がいる。もともと自分が知っている自分としか出会うつもりのない人は、決して「自分でも思ってもみなかったこと」など書けはしない。他者のことばに耳を傾けることができる人こそが、まるで他者のことばのような自分の



連詩制作の後に東京のプリティッシュ・カウンシルで開催された公開シンポジウム
(1998年10月17日)



プリティッシュ・カウンシルでの公開シンポジウムにて。
筆者(中央)の左が詩人のジェームズ・ラズダン氏

ことばと出会うことができるし、それを受け入れることができる。

講演の際に藤野が朗読した小学生たちの作品は実に傑作だった。とても一人で考えたとは思えない。そう言われてみると、いわゆる大人が一人で書いた作品でも、真に驚きを与えるのは、「とても一人で考えたとは思えない」ものだ。一人で考えたものなどたかが知れている。プロットだけではない。段落、文、単語と単語とのつながり……。他者はどの段階でも入り込んでくる。力のある書き手とは、ぜんぶを自分でやる人のことではない。自由に、うまく他者の声呼び込む書き手こそが、思いがけないところに私たちをつれていってくれる。

自分で答を出さない

もう一つ例をあげよう。

最近、演習の授業で実験的にはじめた試みがある。自分では「フンポイントクエスチョン方式」と呼んでいるのだが、やってみると思った以上におもしろい結果が出た。こんなやり方である。授業では通常、詩だと作品一つ、長編小説だとだいたい30～40頁くらいを一回分の範囲として指定する。担当を割り当てられた人はこの範囲の中で「疑問点」を一つ考えてくる。2015年の秋学期はシャーロット・ブロンテの『ジェーン・エア』を読んだのだが、たとえば受講者たちは、「なぜ目の描写が多いのか?」「なぜジェーンはロチェスターに裏切られたのに怒らないのか?」「なぜ重要な場面では『寒さ』が際立つのか?」「なぜ愛の告白は自然の中でなされるのか?」といった疑問点を立ててくる。

疑問点に対しては担当者自らが答を用意してきてもらうことになっているが、その答を明かしてもらう前に、他の参加者にその問いにどのような答がありうるかを言ってもらおう。ここがむしろメインイベントと言っていい。先の例で言えば、「なぜ目の描写が多いのか?」という問いを示すと、受講者からは「ジェーンは男に対するよりも女に対する場合の方が鋭い。これは嫉妬心からくるのではないか」「視覚は理性の象徴。ジェーンはときとして感情を抑えきれなくなる自分を抑制するため、意図的に“目の人”として振る舞うことで目の抑止力に頼ろうとしているのではないか」といったさまざまな意見が出たりする。そんな過程をへて、疑問点を立てた人自身は「ジェーンは観察家であることを誇りにしているから」との答を用意していたことが最後に明かされる、といった塩梅である。

疑問点というと、なぜなぞのように「正解」が用意されていることを期待する人もいる。こうした傾向は理系、とくに工学部あたりから来た受講者にときどき見られる特徴である。しかし、ここではそうした「正解」への欲求は抑えてもらわなければならない。もちろん、「答え」の中にも「お、鋭い」と思えるものはあるだろう。明らかに「それは違うだろう」とか「あまり考えてないな」というものもある。つまり、差異は生ずる。しかし、ポイントは一つの疑問点に対し、複数の「答え」があり得る上に、それらをながめわたすと、『ジェーン・エア』という作品がこれまで以上に奥行きのあるものとして厚みをもって見えてくるということなのである。

この例を今とりあげたのは、この授業での試みにも連詩的な発想、すなわち「すべてを自分ではやらない」「相手への反応から新しい自分を見いだす」という発想がからんでいると思えたからである。そもそも文学研究や人文系の学問に限らず、疑問点を見つけ、それに対し自分なりの答を探すことで議論を展開するという方法は、あらゆる知の根幹となっている。しかし、そこには他者がからみうる。他者から「想定外」の視点が提供され、しかも、それに即興的に反応しなければならない。ところが面白いことに、こうした他者との遭遇を通じ、「正解」よりもずっとおもしろい何かがもたらされることがあるのだ。科学の実験などで偶然、思いがけないヒントを得るといった事態があるのはニュートンの例の逸話を思い起こすまでもなくよく知られているだろう。私たちが、他者の声と出会う訓練をする必要がある場合は意外に多い。

19世紀初頭のイギリスの詩人ジョン・キーツは「消極的能力」(negative capability)という概念を立て、自分でぜんぶをわかってしまおうとはしないことや、わからないものをある程度わからないままで受け入れることが詩人にとっては大事な能力なのだと言っている。キーツが念頭においたのはシェイクスピアだったが、もちろん多くの詩人や劇作家、小説家がそうした能力を備えている。すべてを自分で理解し、自分のことばで説明しつくしてしまう作品は厚みのないものになりがちだ。私たちはそんなものは期待してはいない。むしろ私たちに「わかった!」と思わせてくれるのは、世界をわからないものとして提示しうる作品なのだ。

連詩は単に共同作業であるばかりでなく、遭遇や思いがけない偶然をはらんだ、つまり波乱に富んだ要素を持っている。もちろん波乱

ばかりでは喧嘩になったり、永遠にかみ合わなかったりということにもなる。そんな危うさを乗り越えて何らかの落としどころに達する、しかし、なお、波乱や偶然や遭遇をうちに抱えつづける、そんなことができた作品はきっと大成功なのだと思う。そして、そんな体験が詩人たちにも自分の中の他者と出会う準備をさせてくれるのではないかと思っている。



撮影：川合穂波

阿部公彦 (あべ・まさひこ)

1966年生まれ。現在、東京大学文学部准教授。英米文学研究。文芸評論。著書には『英詩のわかり方』(研究社)、『英語文章読本』(研究社)、『小説的思考のススメ』(東京大学出版会)、『詩的思考のめざめ』(同)、『英語的思考を読む』(研究社)、『幼さという戦略—「かわいい」と成熟の物語作法』(朝日選書)などの啓蒙書と、専門書としては『モダンの近似値』(松柏社)、『即興文学のつくり方』(同)、『スローモーション考』(南雲堂)、『文学をく凝視する』(岩波書店 サントリー学芸賞受賞)、『善意と悪意の英文学史—語り手はどのように読者を愛してきたか』(東京大学出版会)など。『フランク・オコナー短編集』、マラマッド『魔法の樽 他十二編』などの翻訳もある。
<http://abemasahiko.my.coocan.jp/>

03

ジョン・ジェスラン/川村 毅

John JESURUN / Takeshi KAWAMURA

二都物語

——往復書簡から始まった旅

当財団が2014年度から助成し、現在進行中である『東京/ニューヨーク 往復書簡』は、劇作家・演出家の川村毅氏とジョン・ジェスラン氏の二人による戯曲の交流事業である。ジェスラン氏がまず第一章『路上にて』の最初の15分を執筆し、それを受け取った川村氏が続く15分相当の戯曲を書いた。第一章の公開リーディングが2015年2月に東京の森下スタジオで、3月にニューヨークのラ・ママ・ギャラリーで行われた。第二章『森にて』では、最初の15分を川村氏が、次の15分をジェスラン氏が執筆し、翻訳ワークショップ(劇作家を中心とした、戯曲にふさわしい言葉を選ぶ作業)を行い、7月と12月に東京とニューヨークで公開リーディングが実施された。この後、両氏は第三章を執筆し、一本の作品に仕上げる予定である。今回両氏に、戯曲の交換という連歌的な創作方法や、それぞれが暮らす都市が芸術家に与える影響などについて、「往復メール」の形で意見交換をいただいた。(編集部)

From: John Jesurun

Sent: Friday, October 23, 2015 10:55 AM

カワムラ ヘ

このプロジェクトで一番気に入っているのは、最初から未知の世界を扱っていることです。あるプロジェクトを始める場合、普段私は何らかのアイデアもっています。しかし今回はそれとは全く異なる感覚のものです。取りかかるとはあたって、私たちの間にあった唯一のアイデアは、連歌的な形式だけでした。この形式の素晴らしいところは、いかなる方向に導いたり、導かれたりするのが可能なこと。こういうことに関心を持つようになったのは、歳をとったからかもしれません。世の中でコントロールできることは、自分が想像しているよりも少ないのだと段々気付くようになります。地図が役に立たない旅に出発するのは、解放的なことです。あなたに送る最初の部分を書くために机に向かったとき、実に開かれた心で臨み、これがどこに向かうのかという手がかりもありませんでした。常に自分の想像力をこえる何かに取り組むのは、独特な気分になります。

お元気で。

ジョン

From: takeshi kawamura

Sent: Sunday, October 25, 2015 1:15 PM

ジョンへ。

お手紙ありがとう。

あなたが書いている通り、『東京/ニューヨーク往復書簡』の醍醐味は、アンコントロール、予測不能を前提として台詞とストーリーを展開していくことにあります。